
ボクからのクリスマスプレゼント

ハイダウェイ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ボクからのクリスマスプレゼント

【Nコード】

N3450P

【作者名】

ハイダウェイ

【あらすじ】

離婚する両親と最後のクリスマス。

・ パパとママを仲直りさせるために、ボクが考えたアイディアはね・・・
きつと成功するよ。

1話（前書き）

>i15093—511<

画像をクリックするとボクの演奏が聴けます。
よろしければ・・・

1話

またパパとママが喧嘩を始めた。

せっかくの日曜日なのに、もう朝から3回目だ。

ホントなら今日は動物園に行くはずだったけど、雨が降ったせいでずっとおうちの中だし。

パパはお休みの日はほとんどでゴロゴロしてるだけで、一緒に遊びに行くなんて滅多に無いのに。

雨、やまないかなあ……

「勇希も、もう6歳なんだから後片付けぐらい出来るだろ？」

「うん……でも、それ……また後からやろうと思って……」

さっきまでブロックで遊んでたんだけど、ちょっと疲れたから今はお絵かきしてる。

でもせっかく色分けしたブロックや、結構出来上がってきた恐竜を壊すのはもったいないし

そのままにしてあるだけなんだ。ママと喧嘩するとパパはちょっとした事ですぐ怒る。

「勇希、お絵かきかブロックかどっちかにしなさい！狭い部屋なんだから……」

ママまで怒り出しちゃった……

でも狭い部屋っていうのをパパはスゴク嫌がるんだよなあ……きっとまた喧嘩になる。

「しょうがないだろ？俺の給料じゃ今の社宅から出る事はできないんだから

お前も協力してもっと貯金してくれよ。そうすれば例のマンションだって

買えるんだし・・・」

「私だって努力してるわよ！パートの時間だって2時間増やしたんだから」

「増やしたって使ったら一緒だろ？あんな高い化粧品買ったり・・・」

「仕方が無いじゃないの！お友達に奨められたんだから・・・この社宅じゃ

みんな使ってるんだから。そういうお付き合いが出来ないと、ここでは住みにくい

んだからね。何も知らないでそんな事言わないでよ！」

「ああ、わかったよ。付き合い付き合いで服や化粧品、下着にサブリ・・・

一生ここから脱出なんて出来ないさ！」

また始った・・・今日4回目の喧嘩だ。ボクはお絵かきをやめてブックを片付けだした。

奥の部屋でゲームしてる方がきつと楽しい。リビングは嫌いだ・・・パパとママの喧嘩の原因はだいたい決まってる。

まず、ママのお買い物。次はお家の事。それからボクの事。あとは、テレビの

番組が原因の時もあったり・・・

いつからなんだろう？ 去年のクリスマスも喧嘩してたっけ？
そういえばもうすぐクリスマスなんだよなあ・・・

プレゼントは買ってもらえると思うけど、喧嘩は嫌だなあ。
ケーキとか全然美味しく感じないもん。

ボクが寝室でゲームをやっているとママが暗い顔をして入ってきた。

「勇希・・・ママと一緒におばあちゃんの家で暮らそうよ・・・」

「えっ？・・・なんでそんな事言うの？ パパは行かないの？」

「おばあちゃんの家そんなに大きくないでしょ？」

「そうだけど・・・パパはどうするの？」

「パパはここに居るんじゃない？」

「じゃあみんなでここに居ればいいんじゃない？」

「ママ、パパと同じ部屋だと喧嘩ばかりしちゃうから・・・疲れちゃうの・・・」

「パパの事嫌いなのか・・・」

「そうじゃないけど・・・パパ怒ってばかりだから・・・」

そう言うときママは窓の外を見たまま何も話さなくなった。

確かに最近パパはよく怒る。いつもイライラしてる感じだし、ちょっとした事でも

凄く気になるみたいだ。

この前も、ドライバーが無いつて凄く起こった。

自分はいつも同じ場所にしまうんだって・・・

ママは使ってないって怒ってて、結局ボクが怒られた。

片付けたんだけど・・・ちょっと引き出しを間違えただけなのに。

それから1週間ぐらいしてまた大喧嘩した夜だった。

パパが怒って家を出て行ったあと、ママが優しく話しかけてきた。

「ねえ・・・ママね・・・パパと離婚することにしたの」

「・・・そうなんだ・・・」

「勇希はママと一緒におばあちゃんの所で暮らすことになるけど・・・平気だよね？」

「ボクは平気だけど・・・おばあちゃん大好きだし・・・」

「よかった・・・」

「パパにはもう会えないの？」

「そんな事無いよ。勇希が会いたいときはいつでも会えるんだから・・・」

そのときはママのためにもその方がいいんじゃないかなあって、何となく思った。

2話

それから何日かして、パパが凄く酔っぱらって帰ってきた。

ボクは寝てたけど、2人があんまり大きな声で喧嘩してるから目が覚めたんだ。

「いいだろ？ どうせ別れるんだからボーナスをどう使おうと俺の勝手だ」

「そんな事言って・・・勇希はこれからお金がかかるんだから・・・ちゃんと考えてよ！」

「養育費はこの前はなした通りちゃんと払いますよーだ・・・へん！・・・バカヤロー」

「だからって・・・1日に何十万も使うなんて・・・」

そう言ったままママは黙ってしまった。ボクは2人に気づかれないようにこっそり

寝室に戻り、どうやったら二人を仲よくさせることが出来るかずっと考えてた。

でも、すぐ寝ちゃったけど・・・

でも、夢の中でいい答えが見つかったんだ。

その答えはね・・・

その次の日パパはお休みで、朝からリビングのソファーに寝転がってテレビを観てた。

ママは近所のお友達と買い物に出かけてるみたい。

「パパおはよー」

「おっ、早起きだな勇希。一緒にゲームするか？」

「ポケモン？・・・それよりお話があるんだけど・・・」

「どうした？何でも言ってごらん？」

「クリスマスの事なんだけど・・・」

「なんだ、プレゼントの話か？何が欲しい？ゲームか？何でも買ってやるぞ」

「ボーナス出たばかりだからな」

「前に山のおうちに泊まったでしょ？バーベキューしたり・・・」

「ああ・・・あれは貸し別荘を借りて・・・一昨年だったかな？
そういえばカブトムシいっぱい捕まえたなあ」

「あそこでクリスマスしない？」

「えっ？・・・だって冬だから・・・山は寒いぞー。雪だって積もってるし・・・」

「だって・・・ママが最後だって言ってたから・・・みんなでするクリスマス」

「勇希・・・知ってたのか・・・ゴメンな・・・」

「平気だよ・・・会いたい時はいつだって会えるってママ言ったもん」

「別荘かぁ・・・わかった。電話して聞いてみるよ・・・冬でも貸してくれるかなぁ」

「ホント？ 借りれたらママと3人でクリスマスパーティーしようね！」

「よし、早速かけてみよう・・・」

パパが電話をしたら、ちゃんと管理人さんが出てくれたみたいだった。

冬は近くにスキー場があるから、そのお客さんが使ったりしてるんだって言ってた。

あとはママがいいって言えば完璧なんだけど・・・
ボクの計画・・・うまく行くかなぁ・・・

お昼過ぎにママが帰ってきたのでさっきの話をしたんだ。

「えっ？ 別荘でクリスマスするの？ 用意とか大変じゃない？」

「せっかく勇希が提案してくれたんだ・・・何とかしてやりたくてさ・・・」

「私がかまわないけど・・・会社は休めるの？」

「金曜日だけだし・・・どうも俺もリストラの対象みたいで、大した仕事もしてないから」

「そうなんだ・・・あなた会社のこと何も話さないから・・・」

「じゃあ・・・ちょっと買い物に出かけるか？ 飾りつけとか要る
だろ？」

「家が大きいらな」

「そうね・・・外の電飾とかも在った方がキレイかも・・・」

「それにチェーンも要るよな？ 多分雪積もってるし、お昼食べた
ら出かけよう」

なんかいい雰囲気になってきたみたい・・・
ボクの計画はまだ始ったばかりなんだけど、きっと成功するんじゃないかなあ。

3話

12月24日は朝から少し雨が降っていて、ちょっと濡れちゃったけど

荷物をトランクに詰め、9時過ぎには高速道路を走ってた。

「こりゃ途中で雪になるなあ・・・」

運転しながらパパが不安そうに言った。

「あなた大丈夫？ チェーンとか着けるの？」

「ああ、任しとけて。この前買ってから、もう3回も練習したんだから・・・」

最初は難しかったけど、慣れれば簡単なんだ」

「へー・・・そんな事してたんだあ。でも、別荘まで入ってけるのかしら・・・」

結構山の中だったよね・・・」

「まあ・・・行っただけのお楽しみだな・・・」

「ボクも手伝うよ！ 雪かきとか」

「おお・・・頼もしいな。あつ・・・やっぱり雪が降ってきた・・・」

「

窓の外にはホコリみたいな雪が飛んでた。

まだ積もってるとかじゃないけど、パパは少しスピードを落として

運転してる。

途中で2回チェーンを着けたけど、なんとか無事に貸し別荘に着いたのは

お昼を過ぎた頃だった。

「やっと着いたな。 あそこが管理人さんの事務所だ」

「ちゃんと雪かきがしてあるのね。どの建物なのかしら・・・」

事務所に入ると、白い髪の毛の優しそうなおじさんが待っていてくれた。

「よう来たね。2年ぶりかな？ ボクも大きくなって・・・」

「お世話になります。 お元気そうですね」

「元気なんじやが・・・この仕事も年のせいでキツくてね・・・ほれ、この紙・・・」

「管理人募集中・・・辞めちゃうんですか？」

「ああ・・・代わってくれる人を探しとるんじゃないよ。 まあ、こんな田舎だから

そうそうは見つからんと思うがのお・・・はいコレ・・・16番の別荘じゃ」

そう言って、おじさんは家のカギを渡してくれた。

16番は入り口から5軒目の家で2階建てだ。

ボクたちは車を家の前に停め、荷物をみんなで運んだ。

「素敵な家ねー。ほら、暖炉があるわ」

「よし。ちょっと掃除をしよう。ママはリビング。俺はお風呂とトイレを

キレイにしてくる。勇希はママを手伝ってあげて」

「うん。掃除機はボクがかけるよ」

みんなで1時間ぐらい掃除をしたら部屋中ピカピカになった。

「キレイになったわね。じゃあクリスマスの飾り付けをしましょ。この電飾は外のかな？」

こっちがリビング用。ツリーはどこに飾る？」

「ツリーは窓の所にしよう。じゃあ俺が外のを付けてくるよ」

「ボクも手伝う！」

「寒いからダウンジャケット着ておいで。ママどこにしまったっけ？ 勇希のダウン」

「その大きいカバンの中よ。あなたのも入ってるから」

「ダウンなんか着るの久しぶりだなあ・・・最後に着たのはスキーに行ってた頃だ」

「パパ、スキー出来るの？」

「もちろんだよ。パパ、スキー部だったんだぞ。冬休みはスキーのインストラクター」

してたんだ」

「イントス?・・・何それ?」

「イ・ン・ス・ト・ラ・ク・ター・・・スキーの先生だ。ママは生徒だったんだ」

「へー。パパ偉いんだ。先生って偉いんでしょ?」

「まあな。近くにスキー場があるって言ってたから明日滑りに行ってみるか?」

「ボクも滑れるかな?」

「大丈夫!　パパが教えればみんな上手になるんだ。ママだって上手に滑れるぞ」

「もう何年もやってないから・・・滑れるかしら?」

「ママ、明日楽しみだね」

それからボクたちは飾り付けを済ませ、クリスマスのパーティーをしたんだ。

パパはサンタさんの白い髭をつけて、ママは赤い帽子を被ってた。ママの料理と、家から持ってきたケーキをテーブルに並べると3人で写真を撮ったんだ。

「美味しそう・・・ママ、もう食べてもいいの?」

「いいわよ。その前に・・・メリークリスマス!」

「メリークリスマス！ 勇希はジュースで乾杯だな」

ママとパパはワインで乾杯してた。

窓の外を見ると、ふわふわした雪がゆっくりと空から降りてきてた。

4話 完結（前書き）

クリスマスには色々奇跡があるようです・・・

4話 完結

次の日朝早く、スキー場のことを聞くために管理人さんの事務所に
パパと一緒に
行ったんだ。

おじさんは丁度雪かきをしている最中で、ボクたちが行くと息を切
らせながら近づいて
きた。

「すみませんねー。お忙しいところ・・・」

「いやいや・・・年には勝てませんわ。ちつとも作業がはかどらな
い」

「スキー場のことを聞きたかったんで・・・」

「それなら・・・これがパンフレットと地図じゃ。バスがあるから
それを利用するといい。

バス停は・・・ほれ、あそこに見えてる」

「ありがとうございます。大変そうですね、毎日ですか？」

「この時期はなあ・・・道路は市が除雪してくれるんじやが、細か
いところは自分で
やらんといかんから。 家に帰る頃にはヘトヘトじゃわ」

「家は近くなんですか？」

「家は・・・その建物じゃよ。 管理人専用じゃ。 以前は家族で

住んでたんだが

家内が10年前に癌で逝きよってから一人暮らしじゃよ。息子が千葉におってな

早よう来いって言いいよるんじゃが・・・ここの世話をしてくれるもんが

中々見つからんのじゃ・・・田舎じゃでなあ」

「そうなんですか・・・こんな所に住めるなんて羨ましいぐらいなのに・・・」

パパはそう言って管理人募集の紙をじっと見てた。

それからボクたちはお昼ご飯を食べて、3人でスキー場に行ったんだ。

スキーの板や着る物はレンタルして、日が暮れるまで遊んでた。

ボクもスキーを教えてもらったけど・・・ソリで遊んでる方が多かった。

ママは最初転んだりしてたけど、段々かっこよく滑れるようになってきて

パパと交代でリフトに乗ってたみたい。

帰ってきてからも、二人はスキーの話で盛り上がってたみたいだった。

ボクは疲れちゃったからご飯を食べたらすぐに寝ちゃったけど、あさ暖炉のある部屋に

ワインの瓶と料理が置いてあったから、きっと遅くまで話してたんじゃないのかなあ。

ボクがソファーでお絵かきしているとママが入ってきた。

「おはよー。ママ、今日はねぼすけだね」

「ゴメンね。お腹空いたでしょ？ 今、用意するから待っててね・
・」

「うん。ママ、スキーしたから疲れたの？」

「あっ・・・うん・・・そうみたい。もうすぐ出来るからパパを
起こしてきてくれる？」

「わかったよ。わー、美味しそう！」

パパは眠そうにしながら入ってきて、ママが入れたコーヒーを飲んでから話し出した。

「なあ・・・昨日の件・・・考えてくれたかな？」

「うん・・・いい話だと思うけど・・・勇希の学校の事もあるし・
・」

「その辺は管理人さんに聞いてみよう。もし由美子さえ良ければ俺はそうしたいんだ」

「わたしは・・・こんな風に暮らせるのなら・・・」
ママはちよつと泣いてるみたいな感じだった。

「ママどうしたの？ 悲しいことあったの？」

「違うの・・・ちよつと嬉しかったから・・・」

「なあ、勇希。昨日の晩ママとお話したんだけど・・・3人でここで暮らそうかって。」

「お友達のよっちゃんとか会えなくなるけど・・・勇希はどう思う？」

「ボクはみんなで住めるんなら、どこだって平気だよ。それにまだ雪だるまとか作って

ないし・・・もっとここで遊びたいもん」

「そうか・・・そうだよな・・・みんなで住む方がいいに決まっている・・・」

よし、そうと決まれば管理人さんに色々聞いてくる」

パパは朝ご飯を食べたらすぐに、管理人のおじさんとお話をするため出かけていった。

そのあとスツゴク嬉しそうな顔をして帰ってきたパパは、ママと色々話してみた。

ボクの計画とは少し違ってるけど・・・でも、なんだか同じ答えになったみたい。

えっ？ ボクのアイディア？

それはね・・・

煙突のあるおうちにはサンタさんが来てくれるんだよ。知ってた？ ほら、ここには煙突があるでしょ？

だから、パパとママが仲よくなれるゲームをプレゼントしてもらおうと思ったんだ。

だって、幼稚園でも楽しいゲームをすれば喧嘩したお友達とだってすぐに仲直りできるでしょ？

「勇希！ もうすぐ学校のバスが来るわよ。ちゃんと用意できてるの？」

「ちょっと待ってね・・・ほら！この雪だるま持って行くの」

「ダメでしょ？ そんなの持ってバスに乗っちゃあ」

「はい。せっかくお友達に見せようと思って作ったのに・・・」

「学校・・・楽しい？」

「うん！ お友達3人できたよ。タカ君とお・・・ジュンコちゃん・・・まなぶ君」

「そう・・・良かった・・・あっ・・・パパが雪かきから帰ってきたみたい・・・お帰りなさい！ お疲れさまー」

あっ・・・またキスしてる・・・

ここに住むようになってから、ママとパパは時々キスしてるみたい・・・

ちょっと恥ずかしいけど・・・パパ、ママ、仲よくなれてよかったね。

>i15529—511<

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3450p/>

ボクからのクリスマスプレゼント

2011年10月6日01時42分発行